慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済学上より自殺を論じて乃木大将の自刃に及ぶ
Sub Title	
Author	高城, 仙次郎
Publisher	三田学会
Publication year	1912
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.6, No.4 (1912. 10) ,p.757(163)- 779(185)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19121000-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を確立せしむるに肝要なる手段を供し且つ國民一般の思想及び政府の諸法規間に調和を維持するに無二の好材料となれり。中央政府の勢が範圍增大すると共に各州の利益は曩きに憲法立案者が希望せし如くに保證せらるゝなり。

此の事たる感情臆測より到達したる結論にあらずして、實に合衆國憲法史の必然的演繹的結論なり、立憲政體は利害目的に關する實際的共同團體のある責にのみ存すとせば北米合衆國は一の共同團體なるや、或方面より之を觀察すれば一の共同體となる。此の問題は實に觀察點を異にするに從つて異なる、合衆國の社會的經濟的政治的の諸般に亘りて一樣に眞理なる概括的解答を爲すこと蓋し容易の業にあらず。

殊に合衆國は憲法の下に統治せらるゝと同時に自治の國にして實に憲政發展の終局は自治行政を實施するに至るなり。自治なるものは多少の犧牲を省みざれば此を希望したる時如何なる場合に於ても施行し得可き制度にあらず、自治は國民性格の形態にして永き政治教育の後國民に自助自制の念を與へ、秩序的、共同的、生活の習慣を養成し自ら立法者の地位に立つも常に法律を無視せざるに至りて初めて之を實現することを得。自治政治は已に米國本土に實現せられたり。而して吾人は此後周ねく世界に此品性の發動を擴めんことを希望す。（ウイルソン氏米國憲法論による）

經濟學上より自殺を論じて乃木大將の自刄に及ぶ

高城仙次郎

目次

一、緒言
二、自殺とは何ぞや
三、生存欲
四、自殺欲
五、自殺決行の原則
六、自殺の可否
七、乃木大將の自刄

一 緒言

去月十三日午後八時明治天皇御靈轜宮城出門の號砲を期して旅順役の英雄故乃木大將が自宅に於て夫人と共に自害して薨去せしより、大將自刄の可否及び自殺其物の可否に就き世論囂々として底止する所を知らず、幾百の有力家名望家は新聞紙に將又雜誌に各其の意見を發表したるが、此等は概して突嗟の感想を述べたるに止まり、愼重なる態度を以て科學的に自殺其物又は乃木大將自刄を論じたるものに非るが如し。是れ予が本論に於て經濟學上の見地より自殺を論じ聊か此缺陷を補はんと欲する所以なり。論者或は言はん、自殺は經濟學上の問題に非ずと予は是れに答へて言はん、經濟學は普通所謂社會の經濟狀態及び個人の經濟行爲等を研究するものなりと雖も、經濟學の學理を以て經濟行爲經濟狀態以外に他の社會狀態或は他の個人行爲を說明し得ざるの道理なきなりと。如何んとなれば經濟學は根本的に之を言へば人の有する各種の欲望と其欲望を滿たす爲めに人の努力する事實を研究するものなるが、人生は取りも直さず人が各々其欲望を滿足せしめんと爲す努力の歷史なるを以て、人生は是れ卽ち經濟學の研

究の對象物なればなり。而して出產は人生の起點にして、死亡は其の終點ならずや。若し出產が經濟學の一大研究材料たる人口問題上重要たる地位を占むるものならば、死亡も亦同じく重要なる地位を占めずして可ならんや。而して自殺は主動的又は任意的死亡とも名くべきものなり。故に予は經濟學上より自殺を研究し得るのみならず、自殺を說明するは經濟學の學理に如くなしと信ずるなり。是れ予が以下項を逐ふて自殺に關する經濟學的研究を開陳し識者の叱正を仰がんと欲する所以なりとす。

唯本論に入るに先ちて玆に一言して置き度きは本篇に於ては狂人の自殺を除外せること是れなり。予の論せんと欲する所は普通所謂常識を有せるもの丶自殺にして、一時若くは永久的に常識を喪失したる者卽ち狂人の自殺を含まず。狂人と雖も無數の程度ありて一概に之を論ずることを得ざれども、多くは吾人の所謂欲望なるものを自覺せず、且つ又自己の行爲に關する判斷力を缺くものなるが、予は欲望を自覺し自己の行爲に對し多少の判斷力を有する者の自殺に予の所論を限定せんと欲す。

二、自殺とは何ぞや

抑も人は無數の欲望を有し、常に之を滿たさんと欲しつゝあり。其欲望の重なる種類を擧ぐれば、

一、食欲
二、着衣欲
三、居住欲
四、性欲
五、育子欲
六、娛樂欲
七、讀書欲
八、名聲欲
九、旅行欲

十、運動欲

等にして、食欲は更に分ちて日本食欲、西洋食欲、肉食欲、菜食欲等とすべく、着衣欲は之を日本服欲、洋服欲、美服欲等に分つべく、居住に對する欲望を有するもの丶中には日本風の家屋に居住せんことを欲する者もあり。又西洋館に起臥せんことを望む者もあり。又繁華の地に住居を設けんと欲する者あれば、一方には閑靜の地に門戸を構へんと望めるもあり。育子欲と單に云ふも仔細に之を研究せば、男子を養育することを好むものあると同時に女子を望むものあり。娛樂欲には又圍碁欲、狩獵欲、海漁欲、玉突欲等無數の種類を包含す。次に讀書欲を有する者の中には和漢書を好む者、洋書を好む者、小說を好む者、科學書を好む者等の別あり。此外名聲欲、旅行欲、運動欲等も皆殆んど更に無數の階級に分類することを得べし。

然り而して、人は此無數の欲望を滿足せしめんが爲め自己の心身を使用して種々の勞役に服しつゝあり。例へば食欲を滿たさんが爲めに食物を調理し、之を膳に上せて味ひ或は着衣服を滿たさんが爲めに衣服を仕立て之を身に纏ふが如し。

されば食物を調理し喫食に供へ、或は衣服を仕立て之を身に纏ふことを得る迄に準備するは先づ食料品、衣服の材料を入手し、然る後之を料理し、或は又之を仕立てざるべからず、然れども、食料等を入手するには之を購買するか、或は之を自身に生產するを要す。之を購買するには代價を支拂はざるべからず。其代價を支拂ふには或は自身或る貨物を產出して其貨物を賣却して貨幣を入手するか、或は他に自己の勤勞を提供して、以て報酬を受けざるべからず。されば、之を購買するとも將た又た之を自身にて產出するとも、多少の努力を要す。而して、此多少の努力を費して入手したる食料品を更に調

理して之を膳に上すに至る迄には猶幾何の努力を要するものとす。

されど努力は人に苦痛を與ふるものなり。體格、體質、勤勉、修養等の相違に依り人が勞働に堪ゆる程度と時間とには個人間に非常の徑庭ありと雖も、其最高限度は一日間に二十時間內外とす。人は到底連日二十時間以上の勞働に堪へ得るものに非ず。又最少限度に至りては殆んど零點に近きことあり。卽ち少數の個人は一日一時間の勞働に堪へざることあり。而して普通人は勞働時間の長びくに從ひ其の苦痛を一層甚だしく感ずるものとす。今人ありて或る日車夫を傭ひて十時間以上も車を走らせたりとせんか車夫は疲勞の爲め卒倒することあるべく、其後は假令一時間に百圓の割增を與ふるも最早一步をだに進むることを肯へんぜざるに至るべし。

若し諸種の欲望を滿足せしむるに當りて何等の努力を要せず、從つて何等の苦痛を忍ぶことを要せざりしならば、各種の欲望は皆滿足され人は皆幸福の生涯を送り、天下は太平無事なるべし。然りと雖も、欲望を滿足せしむるには、上に論ずるが如く、欲望相當の努力を要し、從つて多少の苦痛を忍ばざるべからざるを常と爲すを以て、人は必ずしも其有する總ての欲望を滿足せしめんとの行爲を敢てするものには非るなり。例へば、自動車を所有せんとの欲望を有する所は無數なるべけれど、自動車購買欲を有するものは少數にして、實際に之を所有し居る者は更に少數なりとす。

然らば人は何故に自己の有する或る欲望を充足せんとするの行爲を敢てするときと、敢てせざるときあるやと云ふに、人が其欲望を充足せんが爲め努力を爲し苦痛を忍ぶに至るは人は其欲望の充足に依りて得る自己の快樂が、其充足の爲めに要する努力の苦痛よりも大なりと思惟したるが故にして、又人が其の有する或る欲望

を充足せしめんと試みざるは其欲望に依りて自己の享有し得る快樂が其欲望充足の要する努力の苦痛より少なりと斷定せしが故なり。都市の當局者が音樂隊を招聘して公園に於いて無料にて市民に音樂を賞美せしむるとき、晴天なれば來聽者多く、雨天若しくは天候險惡なれば來聽者少なきことは人の知る所なるが、晴天に來聽者多きは好樂家が其音樂に依りて得る快樂が公園に行く爲めに要する努力の苦痛よりも大なりと思惟したるもの多き故にして、雨天のときに來聽者少なきは前者が後者よりも大なりと思惟したるもの少なきに基因するものとす。雨天の際の來聽者の多くは主として公園附近に居住する者なるは這般の消息を語るものなり。

而して欲望は之を根本的欲望と派生的欲望との二大部門に分つことを得べし。根本的欲望とは前揭の十種の欲望卽ち、食欲、着衣欲、居住欲、性欲、育子欲、娛樂欲、讀書欲、名聲欲、旅行欲、運動欲等の充足に依りて直ちに人に快樂を與ふるものを云ふ。派生的欲望とは此根本的欲望を充足せしむるに必要なる手段を講ずる爲めに生ずる欲望を云ふ。例へば直接其の充足に依りて人に滿足を與ふる食欲を滿たす爲めに食料品入手の欲望生ず。次に此食料品入手の欲望を滿たせんが爲めに、金錢獲得の欲望生じ、金錢獲得の欲望を滿たさんが爲めに勞働の欲望起り、勞働の準備として、修業の欲望發生す。而して此等の欲望卽ち食料品入手欲望、金錢獲得の欲望、勞働の欲望及び修業欲は卽ち派生的欲望にして此欲望の充足に依りて人は間接に其欲望を滿たすことを得るものとす。又此間接的又は派生的欲望に對しても、前に論じたる欲望充足の原則卽ち充足の快樂が夫れに伴ふ苦痛よりも大なるを要するとの理は應用さるゝものなり。

以上論ずる諸種の欲望は一般に各經濟學者の

擧ぐる欲望なるが、普通經濟學者の看過せる二種の重要なる欲望あり。生存欲並に自殺欲卽ち是なり。

各生物が常に出來得る限り永く生存せんと欲することは是れ生物界の最大法則にして、俗諺にも『命あつての物種』と云ふ。生存欲は生物の本能にして此本能は人類に於いて最も大に發達し、普遍的なるを以て、何人も之を怪まず、從つて經濟學上之を研究せるもの殆んど皆無なるは是非なけれ。又自殺欲は生存欲の正反對なる欲望にして、是も亦今日迄餘り多く經濟學者の注意を惹かざりし所なり。さはれ吾人は此重要なる欲望の經濟學的研究を等閑に附して可ならんや。されば、吾人は先づ左に自殺欲を了解するに必要なる生存欲を論じ、然る後、轉じて自殺欲に論及せんと欲す。

三、生存欲

尙項に論ずる如く人は少數の例外を除くの外皆生存欲を有し、且つ大多數の人は此欲望を充足しつゝあり。而して人が生存欲を有する理由は其の有する諸種の欲望の充足に依りて得る現在及び將來に於ける快樂が、其充足の爲めに要する現在及び將來に於ける努力の苦痛に勝ると思惟せるに在り。詳言すれば、食欲着衣欲、居住欲、名聲欲、其他有らゆる欲望の充足より得る快樂が、食料品を入手する爲め、衣服を入手する爲め、住家を入手する爲め、名聲を揚ぐる爲めに要する努力の釀す苦痛よりも大なりと斷定せしが故なり。今假りに人ありて食欲、着衣欲等の十種の欲望を有し、自己の生命は今後猶ほ一定期間持續するものと假定して其の欲望の充足に依りて得る現在及び將來に於ける快樂と其充足の爲めに要する努力の苦痛とを左表の如く豫算しとりとせよ。

欲望	其欲望の充足に依りて得る快樂	其充足の爲めに要する努力の苦痛
食欲	一五〇	一〇〇
着衣欲	二五〇	二〇〇
居住欲	四〇〇	三〇〇
性欲	五〇〇	八〇〇
育子欲	七〇〇	二〇〇
娯樂欲	九〇〇	一〇〇〇
讀書欲	八〇〇	四〇〇
名聲欲	六〇〇	二〇〇
旅行欲	三〇〇	五〇〇
運動欲	四〇〇	三〇〇
合計	五〇〇〇	四〇〇〇

右表に示す所に據れば、十種の欲望の充足に依りて得る快樂の合計は五〇〇〇にして、其充分の爲めに要する努力の苦痛は四〇〇〇なり。卽ち前者の後者に勝ること一〇〇〇なりとす。若し斯くの如く欲望の充足より來る快樂が其充足に伴ふ苦痛より多しと思惟されたりとせば吾人の假定せる個人は生存欲を有すべし。人類の大多數が生存欲を有せるは主として此理由に因づくものとす。

論者或は言はん、人は斯くの如く自己の欲望と苦痛とを比較計量するものに非ずと。然り、人は吾人の假定せる如く正確に算數を用ゐて兩者を比重するものに非ず。さはれ、吾人は常に無意識に兩者を比較しつゝあるなり。例へば前に擧げたる公園の無料音樂會の例に於ける如く、晴天なれば來聽者多く、雨天ならば來聽者少なきは是れ明かに好樂家が快樂と苦痛とを比較せるが故なり。

更に論者言はん、假令人は快藥と苦痛とを比較するものなりと雖も、快樂と苦痛とは數字を以て之を表示すること能はざるものなりと。然り、快樂と苦痛とは直接に之を數字にて表はすことを得ざるなり。然りと雖も前表には單に各

欲望の比例と各苦痛の比例を對照せしめたるに過ぎざるなり。人は常々各欲望の充足より得る快樂を比較しつゝありて、此比例は數字を以て表示し得るものなりとす。例へば夏の衣服を新調せんと欲する者が木綿飛白一反に二圓以上を支拂ふを好まず。帷子の飛白一反に二十圓を投ずるを辭せざるは木綿の衣服を着用して得る快樂は帷子の飛白を着用するときの快樂の十分の一と看做したるが故なり。又苦痛の場合も然り。例へば鐵道乘客が停車場内に於ける手荷物運搬に對して支拂ふ金額は僅かに數錢なるも、之を停車場より自宅へ運搬するには數十錢を投ずることあるは若し自己が其手荷物を運搬したりとせば當然忍ぶべき苦痛を前者の場合には數錢、後者の場合には數十錢に見積りたるが故なり。因是觀之、快樂と苦痛とは一見計量し難きものなるの觀あるも、貨幣を通じて之を間接的に比較計量し得るものとす。(註)

註、此快樂苦痛間の比較計量を一層正確と爲さんと欲せば、金利を以て將來に於ける快樂と苦痛とを割引せざるべからず。例へば、今日中に食欲の充足に依りて得る快樂の豫算と明日中に同一の食欲の充足に依りて得る快樂の豫算とは一致せず、又本年中に食欲の充足に依りて得る快樂の豫算と明年中に同一の食欲の充足に依りて得る快樂の豫算とは一致せざるものとす。是れ人が現在の快樂をば將來に於ける快樂よりも大なりと思惟するが爲めなり。而して此時間の相違より來る快樂の差は金利なる經濟現象の生ずる所以にして、其差の程度又は率を利率と云ふ。されば現在及び將來に於ける快樂と苦痛の總額を比較するに當りて利率を以て之を割引せざるべからず。今或る生存欲を有する個人が其の有する各種の欲望の充足に依りて得る快樂曲線（一單位の時間内に於ける、例へば一日、一週間、一ヶ

月、一年等の如き）を$(x)(x')(x'')$等とし、其充足に伴ふ苦痛曲線（同單位の時間内に於ける）を$(y)(y')(y'')$等と爲し、iを以て利率を表はし、tを以て各其時間單位の總數を示すとせば、此個人の生存欲の公式は左の如くなるべし。

$$M \int_0^{t} \frac{(x)dx}{(1+i)^t} \quad V \quad M \int_0^{t} \frac{(y)dy}{(1+i)^t}$$

論者又曰はん、人は生存欲を有する故に食欲、着衣欲等を有するものにして、食欲、着衣欲等の欲望を有するが爲めに生存欲を有するものに非ずと。然り人は生存欲を有するが故に食欲、着衣欲及び其他の二三の根本的欲望を有するに至るものなれど、生存欲を有する所以は、此等の欲望充足の快樂が其欲望の充足に要する努力に勝る爲めなるを記憶せざるべからず。

されば、斯くの如く、生存欲は欲望充足より來る快樂其充足に伴ふ苦痛よりも多しと推定さるゝに因り存在するものなるが、生存欲を有し居る者は其生存欲の基礎たる各種の欲望を悉く充足せんと試みるものには非ざる也。例へば、表に示す如く、食欲の滿足が一五〇の快樂を與へ、其の充足に伴ふ苦痛が一〇〇に過ぎざるときは勿論此欲望を充足せしめんと試むるに至るべけれど、之に反して、娯樂欲の如く、其の充足に依りて得る快樂が九〇〇にして、夫れに伴ふ苦痛が一〇〇〇に上るときは此欲望を充たさんとはせずして、他の有利の欲望例へば讀書欲を充足せしめんと努め、一旦生存欲を有するに至りたる上は出來得る限り少許の苦痛を以て、最大の快樂を得んと努むるものとす。

又生存欲の基礎は各根本欲望と苦痛とに在るを以て、其根本的欲望の强弱と苦痛の大小とに依り生存欲の强度を異にす。今左に四五の階級を擧げて、各其階級に屬する者が有する生存欲

の強弱を概論せんと欲す。

（一）男子と婦人　普通男子は婦人よりも多く且つ強き欲望を有す。娯樂欲、讀書欲、名聲欲、旅行欲、運動欲等に於て殊に其の差の著しきを見る。之に反して、婦人は精神、身體共に其の發達男子の夫れに及ばざるを常と爲すを以て、欲望充足の努力に伴ふ苦痛を男子よりも一層激しく感ずるものとす。されば欲望の充足より來る快樂（以下單に快樂と稱す）の總計と其充足の努力に伴ふ苦痛（以下單に苦痛と稱す）の總計との差は男子に於けるよりも婦人に於ける方少なきを常とす。從つて婦人の生存欲は男子の生存欲程強盛ならず。米國の或る女子大學にては時々其年の卒業生に對して男子に生れ變ることを欲するやとの問を發することあるが、然りと答ふる者常に百人中八九十人に上ると云ふ。曾て我國の或る女子專門學校に於いても此種の統計を取りたるに同樣の結果を得たりと聞く。是れ偶然の結果に非ざる也。

（二）小兒、青年と老人　小兒は快樂を知りて普通苦痛を多く感せず。彼等は生活資料の供給を父母より受け、之が爲めに何等の努力を要せず。從つて小兒は生存欲強し、否な彼等には死の觀念殆んど無し。青年は食欲、着衣欲、娯樂欲、讀書欲、名聲欲、運動欲、等旺盛にして、其の充足に依りて得べしと豫想する快樂強大なり。之に反して、精神身體の發達期に在るを以て各種の欲望の充足に要する努力の苦痛を感ずること少し。されば青年は生存欲最も強盛なり次に老人欲望の種類分量共に少なく、且つ餘年幾何も無く、又一方には心身共に衰弱せるを以て、苦痛を感ずること多し。されば老人には生存欲全く無きか、或は有りても少なきを常とす。

（三）健康者と病身者　健康の人は欲望多く苦痛少なし。之に反して、病身者は欲望少なく

苦痛多し。されば、前者生存欲は強く、後者の生存欲少なし。

（四）無教育者と有教育者　無教育者は食欲着衣欲、居住欲、性欲、娯樂欲等旺盛にして、有教育者は讀書欲、名聲欲、旅行欲、運動欲等盛んなり。又無教育者に取りては心的勞働は苦痛甚だしく、有教育者に取りては身體的勞働は苦痛多し。因是無教育者と有教育者との間に於ける生存欲の強弱は兩者の境遇に依りて定まるものとす。

（五）貧者と富豪　貧者と富豪との間に於ける欲望強の差は甚だしからざるも、苦痛の差著しきものとす。例へば食欲は貧者も富豪も共に之を有するものなるが、貧者は之を充足するに終日勞働して食品を購はざるべからず。之に反して、富豪は食品入手の爲めに故らに勞働するを要せず。又着衣欲に於いても然り。貧者と雖も絹布を纏ふことを欲せざるものなし。唯此欲望を滿たす爲めには或は數日前絶食せざれば能はざることあり。富豪は之に反し、絹布を購ふに當りて、貧者が木綿の衣服を購ふ爲めに努力するとき程の苦痛を感せざるなり。其他の欲望に就きて之を觀るに同一の結果を得るなり。されば、貧者の生存欲は弱けれど、富豪の生存欲は強し。

（六）平民と貴族　貴族は社會に於ける地位其物より快樂を味ふことを得るに反し平民は社會に於ける地位の低き爲めに苦痛を感ずることあるものなれば、富力に於て同等なりとするも貴族は概して平民よりも生活欲強し。

（七）平民と軍人　軍人は何日何時戰地に赴き國家の爲めに命を捧ぐるに至るやを測られざる地位に在る者なれば、平時に於ても自己の長壽を絶對的に期待せず、從つて將來の生命を重視すること少なきを以て、生存欲は平民よりは弱きを常とす。

四　自殺欲

以上吾人は自殺欲と密接の關係を有する生存欲を論じたるが、自殺欲なるものは果して如何なる場合に發生するものなるや。惟ふに自殺欲は之を二種に大別することを得べし。曰く、消極的、曰く、積極的、卽ち是れ也。

消極的自殺欲は生存欲の充足に依りて得る快樂よりも、其の充足に要する努力に伴ふ苦痛の方多きときに起るものとす。故に概して之を論ずれば、男子より婦人に、青年よりも老人に、健康者よりも病身者に、富豪よりも貧者に、貴族よりも平民に、平民よりも軍人に自殺欲起り易き傾向あり。

されば、自殺の原因を通觀するに最も普通なる原因は

一、不治の病
二、貧　困
三、負　債
四、失　戀
五、罪　惡
六、厭　世

等なり。不治の病に罹れる者は假令醫師より四五年乃至十年の存命を保證さるゝも、最早自己の生存に依りて得る快樂は頗る僅少にして、此快樂少なき生命の爲め甘受せざるを得ざる苦痛は益々甚だしく、遂に後者は前者よりも大なりと斷定し、自殺欲を持するに至るものとす。

貧困者にして意志薄弱なる者は、如何程奮勵しても蓄財の見込なきのみならず、收入の增加せざるにも拘はらず、家族の增加又は自己若しくは家族の疾病等にて失費のみ嵩じて、益々努力するに從ひ愈々困窮するに至り、遂に生存に依りて得る快樂は其の爲めに拂ふ犧牲に遠く及ばざるものなりと思惟し、自殺欲を生ずるに至るなり。

負債は聊か廉恥心を有する者の恥辱と爲すにして、夫れの釀す不名譽の與ふる苦痛は生存に依りて得る快樂に勝るものなりと思惟さるゝこと罕ならず。

失戀の爲め多くの青春の男女が自殺欲を有するに至るは、自己が慈愛せし異性の個人と夫婦的の關係を結び、之に依りて多大の快樂を得んと期待せしに計畫齟齬して自己の將來に於ける快樂の一大部を一掃されしが如く思惟すると同時に苦痛は增加するとも減少せざるを以て、前者は到底後者に及ばざるものと斷定し、終に自殺欲を懷くに至るものとす。

罪惡を犯したる者は其の露現と刑罰とを恐れ、之が爲めに生ずる苦痛の大なるを豫想し、生存に依りて得る快樂は寧ろ微々たるものなるを感じて、遂に自殺欲を起すに至るものとす。

厭世とは經濟學上より之を論ずれば、食欲、着衣欲、娛樂欲等の各種の欲望頗る薄弱なるにも拘はらず、其欲望の充足に要する努力は各種の欲望强き人に對すると同等の苦痛を與へ、從つて差引快樂よりも苦痛を與へ從つて差引快樂よりも苦痛の方多しと斷定さるゝときに發生するものとす。

此外其原因の如何を問はず、消極的自殺欲は前述の如く、生存欲全く消滅したるとき發生するものなり。

次に積極的自殺欲は消極的自殺欲の如く、快樂よりも苦痛の方多しと斷定されたるとき生ずるものに非ずして、自殺に依りて或る特種の目的を遂げんと欲するとき生ずるものとす。積極的自殺欲の目的の中にて重なるもの四五を擧ぐれば左の如し。

一、死後に於ける自己の名聲
二、殉　死
三、諫　言
四、愛せる者の利益

強盛なる名聲欲を存する者が轗軻不遇の地位に立ち自己の名聲欲を滿たすと能はざるとき、大罪を犯して天下の耳目を聳動せしめ、或は名所古蹟に於いて自殺を遂げて、自己の姓名が廣く天下に傳へられんことを冀ふことあり。大罪を犯して刑に就くは是れ一種の自殺にして、無政府黨員等に往々此方法に依りて其の名聲を滿たさんと欲する者あり。

殉死は强制的なると任意的なるとを問はず、亡君の靈に從はんとの特種の目的の爲め、自殺を遂ぐることなり。其の起原は靈魂不滅の迷信に在りて、亡君が死後猶ほ他界に於いて、生存せるものなれば、生前に於けると同じく他界に於いて、亡君の左右に侍せんとの希望に基づくものなるが、一朝此風習が殆んど不文の法律の如く爲りたる後は、其風習に違反するは不忠不道德と看做さるゝに至るものとす。

現代に於いては諫言の爲め自殺する者殆んど皆無なれど孝子が父に諫言せざるが爲め、妻が夫を勵し、或は暴行を諫止せんが爲め、或は慈母が愛子を奮起せしめんが爲めに自殺を遂げる例封建時代の我國に尠からず。赤垣源藏の老母が自殺して、源藏をして後顧の患なからしめ、義士の名聲を全ふせしめたるは其一例なり。

要するに積極的自殺は、心身上の苦痛より來る消極的理由に基かずして、上記及び其他の特種の目的を達せんが爲め發生するものとす。

五、自殺決行の原則

抑も欲望には充足されずして、單に欲望として存在するものと、充足さるゝか或は充足を試みらるゝものとの二種あり。欲望が充足されずして其欲望を懷く者が單に其欲望の充足を希望するに止まることあるは、其欲望の充足に要する犧牲が、其欲望の充足に依りて得る快樂よりも大なりと思惟さるゝが故なり。又或る欲望を

懷ける者が之を充足せしめんと試みるは、其の充足に要する犧牲が其充足に依りて生ずる快樂よりも少なしと斷定したるを以てなり、例へば食欲着衣欲等の充足には多少の失費を要し、乘馬欲等の充足には多少の失費を要すると同時に多少の身體の危險を冒さゞるを得ず。若し夫れ、盲腸炎等の疾病の全治の爲め手術を受けんとの欲望を有する者は莫大の失費を負擔するのみならず、非常なる苦痛を忍ばざるべからず。又、第一流の割烹店に於いて美食を味はんと欲する者一食十數圓を要することを聞かば、自己の收入と比較して、其一食に對する犧牲が其美食より生ずる快樂よりも大なりとして、其の決行を他日に延ずることあり、又乘馬欲を有する者にして夫れに對する失費には堪へ得るも、乘馬の危險なるに想到し、自己の身命を捧げて、數時間の快樂を求むるに躊躇することあり。手術に對する欲望も亦然り。患者が往々手術の酸す苦痛を恐れ、手術の好時期を逸し、遂に死に瀕するに至ることあるは吾人の常に見聞する所なり。

而して、自殺欲の充足は苦痛の甚だしき點に於いては被手術欲に類似するものなるが、出費の點に於いて大差あり。手術を受けるには通常莫大なる失費を要すれど、自殺に要する費用は少額にして其の重なるものを擧ぐれば左の如し

劇藥飲用
刀劍類の使用
鐵砲の使用
縊　首
入　水
汽車の利用（鐵道自殺）

此の五種の方法は皆苦痛を與ふるものなるは自殺者の豫知する所なり。されど、此五種の方法の要する費用は多額に上ることなし。劇藥は數錢にて購ひ得べく、刀劍と云ふも剃刀等の所持品を利用することを得べく、鐵砲は新調する

となすも、猶ほ十數圓にて購入するを得べく、縊首に至りては紐一本を要するのみ。入水には單に海岸、河岸等に密行せば事足り、汽車の利用も唯鐵道線路内に潜入することを要するのみなり。

轉じて苦痛の程度の差如何と觀るに、劇藥の苦痛は通常人の經驗したるとなきものなれば、益々廣く自殺者に利用さるゝの傾向あり。醫家の藥局生又は書生が多く此方法に依りて自殺を遂ぐるは、劇藥を入手するに最も便利なる地位に立てるが故なるべし。

創痍の與ふる苦痛は多少人の皆經驗したる所なるを以て、人が其の苦痛を恐るゝこと最も甚だし。從つて刀劍類を用ゐて自殺する者は多からず。又此方法を用ゐて自殺を遂ぐる者軍人間に多きは、軍人は左程創痍の苦痛を恐れざると同時に他の女々敷方法を用ゐて死後に嘲笑さることを避けんと欲するが故ならん。

鐵砲類の使用は多少の熟練膽力とを要するを以て、婦人が此方法を用ゐて自殺することは殆んどなく、男子にても、臆病者又は躊躇的に全く經驗無き者は、此方法に依ること罕なり。

縊首の與ふる苦痛は人の皆傳說に依りて知る所なるも、紐一條を有せば、屋内に於いて實行し得る最も簡便なる自殺法なるを以て、婦人又は老人に依りて最も多く用ゐらるゝものとす。數ヶ月、數ヶ年間病床に呻吟せし者が此方法に依りて自殺を試みることあるは如何に此方法が簡便なるかを證して餘りあり。

入水は數分間に亘りて非常なる苦痛を與ふるものなることは自殺欲を有する者の豫知せる所なるも、此方法は臆病者には最も適當せる方法と謂つべし。如何んとなれば、入水は劇藥飲用の如く、自殺其物の決心以外に自殺遂行に要する大決斷（例へば藥瓶を手にして、口に當てるが如き）を爲すに當りて、全く自己の勇氣と筋

肉の主動的努力を要するものに非ずして、將に入水せんとして河岸に立てるものは單に地球の引力を利用して、少しく體の中心を變動せしむれば事足るなり。（橋上等より投身する者は橋の欄干に攀る爲めに多少の自發的努力を要すれど此種の努力は皆準備にして、吾人の玆に大決斷と稱するは、自殺者と社會とを分離する自殺者生前の最後の行動を指すものとす。）されば婦人にして此方法を用ゐて自殺を試みる者多し。

鐵道の利用の與ふる苦痛は一秒時位以上には繼續すべきものに非ずして、自殺者は殆んど之を感ずること無かるべし。唯列車の轟々として進行し來りて、刻一刻と接近するを待つ苦痛は蓋し名狀し難きものならん。惰死者が多く此方法を用ゆるは兩者共に首尾能く自殺を遂ぐるを得て、他の方法を用ゐたるときの如く、當事者の内一人が死亡し他の自殺が失敗に終るが如きことなきを以てなるべし。

要するに、自殺欲を有する者は、其自殺欲が消極的原因より發生したると、積極的原因より發生したるとを問はず、上に論ずる自殺決行に伴ふ苦痛が、其の自殺欲の充足に依りて生ずる快樂に及ばざるものと斷定するとき自殺を決行するものとす。故に消極的自殺欲を有する者の中にて自殺に伴ふ苦痛を以て其欲望の充足より生ずる快樂よりも強大なりと思惟して、自殺を決行せざる者多かるべし。之に反し、積極的自殺欲を有する者は。或る特種の目的を達せんが爲めに自殺欲を懷くに至りたるものなるを以て其欲望も強く、從つて其の充足の爲めに多大の犧牲を拂ふことを辭せざるべし。

六、自殺の可否

自殺の可否を論ずるに當りて、先づ其見地を明かにするを要す。惟ふに自殺の可否は自殺者其物の立場、自殺者の推論の適否及び社會に與

ふる其人の自殺の影響の三方面より之を論ずることを得べし。否な之を論ずるを良しとす。

先づ自殺者其物の立場より之を論せんに、自殺者は自殺欲を有し、其欲望の充足に由りて生ずる快樂が、其充足に要する犧牲よりも勝れりと斷定したるが故に自殺を決行したるに過ぎずして、他の欲望、例へば食欲、着衣等の充足の場合と性質に於て異なる所なし。唯異なる所は程度の問題なり。食欲、着衣欲等の充足は左程人の注意を惹かざるものなるも、自殺は天下の耳目を聳動するの傾向あり。されど、自殺者其物の立脚地より云へば、一欲望を充足したるに過ぎざるなり。自殺者は自己の有する判斷力を用ゐて、自殺の利害を打算して、自殺するを以て自己の利益と斷定したるものなれば、自殺者は欲する所を實行せるのみ。されば他の欲望を充足するを批難するの程度に於いて、自殺欲の充足を批難し得べきも、自殺欲が人の注意を惹く欲望なるの故を以て特に自殺を批難すべきものならず。

然りと雖も、自殺者が果して其の推斷に誤謬なかりしかを論ずるは第三者の爲し得べき所にして、又當然爲すべきものとす。自殺者の推斷を批評するに當りて、第一に自殺者の自殺欲は消極的なりしか、將た又た、積極的なりしかを確め、然る後、若し消極的自殺欲なりしならば自殺者は生前果して、自殺に値ひするの苦痛を蒙り居たるや否や、他に此苦痛を輕減するの方法なかりしか、若し又、積極的自殺欲たりしならば、自殺は其の特種の目的を達する最上の策なりしや否やを討究すべし。

次に自殺が社會に與ふる影響を論ずべし。抑も斯かる場合に於ける廣義の社會とは自殺者以外の總ての人を總稱するものなれば、其社會は自殺者との關係上多くの階級に屬し、各異れる利害得失の關係を有する種々の人より成るは明

かなり。假りに有力の在朝政事家が自殺たりしとせば、其自殺者との關係上に於ける階級の主なるものは左の如くなるべし。

親戚
朋友
同窓
同鄕者
同政黨
反對黨
政府
學校教員
宗教家
社會教育家
他の國民

右の內、此政事家の自殺に因りて、親戚は一大打擊を蒙むるは勿論なるを以て、此の政家事の自殺は親戚に取りては不可なるは論なし。朋友も亦有力なる朋友を失ふことなれば、政事家の自殺は朋友に取りても亦不可なり。同窓、同鄕者も是れに準ずるは明かなり。されど同政黨に至りては必ずしも然らず。此の政事家の自殺に因りて其黨の勢力頓に凋落するが如きことあらば、全黨の不利益なるべく、從つて此自殺は其政黨に取りて不幸なる事件と謂つべし。されど、若し其の自殺の爲め全黨の勢力には何等の影響を與へずして、單に其黨內にて自殺者の屬せし派の勢を殺ぎ、他派をして覇を握るに至らしめたりとせば、此の自殺は全黨に對しては可否孰れとも決し難く、唯自殺者の屬せし派に對して不可にして、他派に對して利益あるものと謂つべし。又反對黨の見地より之を論せば、若し自殺者の屬せし政黨全體の勢力が其の自殺に因りて何等の痛痒を感せずとせば、此自殺の可否は問ふ必要なし。然れども、若し其黨が之に因りて打擊を蒙むるものなりとせば、反對黨に取りては此自殺は有利のものと看做すべし。

次に政府の立脚地より之を論せんに、若し自殺者が行政上必要缺くべからざるの人なりしならば、政府は其の自殺に因りて失ふ所多きものにして、若し又、自殺者が勢力は有し居りたるも、實際無能にして曠職甚だしく、政府内に於ける一種の寄生蟲とも云ふべき人なりせば、其の自殺は却つて政府の利益なるべし。

又學校教員の見地より之を論せば、自殺が如何なる印象を學生に與へたるか、且つ如何に自殺を教材として利用し得るかに依りて、其の自殺の可否を判定すべく、而して、其の印象は自殺者の地位、名望、自殺の原因、自殺の方法且つ自殺に對する一般の世評等の如何に依りて定まるものと謂つべし。轉じて、宗教家の立場より觀れば其宗教の教義と自殺との關係及び自殺の原因等の如何に依りて、自殺の可否を論ずるものとすべきものなるべし。次に社會教育家の立脚地より之を論ずれば、有力家の自殺が自殺熱を流行せしむる虞なきや否やを考究するの要あり。若し其虞ありとせば、此社會教育家は自殺を以て不可と看做すに至るべし。

終りに、其他の國民一般の見地より之を論ずれば、有力者の自殺が果して可なるや否やは、自殺者の國家に對する價値の如何に依るものとす。國家に取りて有用なる人物なれば、其の自殺は不可とせざるを得ず、又功罪相償ふの人物なれば、國民は何等の痛痒を感せざるべし、之に反して無爲の人にして、且つ性行良しからず社會に害毒を流すこと甚だしき者ならば、其の自殺は却つて歡迎すべきものなるべし。

七、乃木大將の自刄

吾人は本項に於いて乃木大將の自刄に言及して本論を結ばんと欲するものなるが、吾人は決して此將軍の自刄に對して最後の斷案を下さんと試みることを欲せず、單に前數項に於いて論

じたる自殺の原則と、自殺の可否斷定の原則との應用に就き一言せんとの希望を有するのみ。

前數項に於いて再三論じたる如く、或る自殺者の自殺を論ずるに當りて、先づ自殺者が何故に自殺欲を有するに至るかを闡明するを要す。然るに乃木大將の自殺の原因は不明なりと云はざるを得ず。發表せられたる遺書の語る所に據れば、乃木將軍は西南役に於いて、自己の率ゐたる聯隊が敵の爲めに擊破され、其の聯隊旗を敵に奪はれたると、旅順港に於いて數萬の青年の身命を犧牲に供したると、二人の子息を失ひたるとに因り、一は自己の罪を贖ひ、一は樂み少なき老後の苦痛より免かれんとせるが如し。然りと雖も、左に掲ぐる將軍の辭世に據れば、大將の自刄は純然たる殉死の如し。

うつし世を神さりましゝ大君の
みあとしたひて我はゆくなり

若し乃木大將の自刄が殉死に非ずして、他の原因に基づくものにて、唯自裁の時機が偶然明治天皇の靈轜御出門の時刻と一致したるのみとせば、乃木大將は決してみあとをしたひ(慕)て行きたるには非ず。殉死は他に自殺の原因無きときに成立するものなり。若し他に原因ありて自殺せしならば、假令其の時機が明治天皇の御大葬の日と時を同ふしたりとて、這は純然たる殉死には非ず。

又茲に注意すべきは未だ發表せられざる遺言書なり。此書類中には、宮内省に關するもの一通教育に關するもの一通及び軍務に關するもの一通ありと傳ふ。吾人の知らんと欲する所は此三通の遺書の内容と、其内容と大將自刄の原因との關係なり。大將は自己の生命を犧牲に供して迄も直言せんと欲したる所なき乎。

又風説に據れば。乃木大將は現代の風潮に慊らざる所あり、且つ明治の教育の効果を憂慮し殊に貴族の子弟の教育には痛く失望せられたり

と云ふ。次に、兼ねてより寵愛を蒙れる明治天皇が突然崩御せられたるより、悲哀の情禁じ難きものありたりと。

要するに、吾人は乃木大將自刄の原因に關しては正確なる知識を缺くものと謂つべし。さはれ若し以上述べたる臆說、風說等を事實として之を論ぜば、其原因を大略左の如く分類するを得べし。

甲、消極的原因

一、聯隊旗事件
二、旅順事件
三、愛息の戰死
四、老後の寂莫
五、現代風潮に對する苦悶
六、學習院々長として失望
七、明治天皇の崩御

乙、積極的原因

一、旅順戰死者の遺族に對する同情的自殺
二、風潮の革正
三、宮內省、陸軍省及び文部省に對する建議を一層有効ならしめんとの希望

前述の如く、乃木大將自刄の原因は明かならざれど、惟ふに其原因は複雜なるものにして、或は玆に揭ぐる如く、消極的原因と積極的原因とを含めるならん。此諸種の事情の爲め、將軍は一方に於いては生存の苦痛を感ずること甚だしきか、或は又特種の目的（積極的原因）を達せんと欲すると同時に、又一方に於いては、身は陸軍の顯職に在りて、偉名赫々として世界に轟き、所謂名を成し功を遂げたる人なれば、今後幾年生存するとも、自己の名聲を益々發揚するの餘地少なかるべく、且つ假令餘地ありとするも、餘年幾何も無き身なれば、今後の生涯より得る快樂は頗る僅少なるべき理なるを以て、將軍は遂に自殺欲を懷くに至りたるに非ざるや

自殺欲を有するに至りたる原因は孰れにもせよ、乃木大將が一旦此欲望を懷くに至らば、之を充足せしむることを躊躇せざるは自明の事に屬す。如何となれば、身は軍人なるのみならず武家に生れて、且つ數回の實戰に加はりたる人なれば、自殺の苦痛を恐るゝこと少なく、且つ明治天皇の御大葬なる一好時期に際會したればなり。

要するに、乃木大將の自刄が精神錯亂より決行せられしものに非ざる限りは、相當の理由ありて自殺欲を有するに至り、遂に其欲望は充足せらるゝに至りたるものなるを以て、乃木大將の立脚地より之を論ぜば、正當の行爲なりとす。唯乃木大將は苦痛、快樂等を比較秤量するに當りて、果して何等の誤算無かりしや否やに關しては多少の疑點あるべけれど、吾人は乃木將軍自裁の眞相を熟知せざるを以て、之を論評するの權利なし。

若し夫れ社會に對する將軍の自刄の可否に至りては自刄の原因の何たるを問はず、社會に與へたる影響を標準として之を討究すべきなり。而して、社會は、前述の如く、對自殺者との關係上の多數の階級に分かたるべきものにして、乃木大將の場合に於きては、親戚、朋友、同鄕、同僚、一般陸軍々人、海軍々人、宮內省、學習院、政府、敎育家及び他の國民一般とに之を分つを得べし。此諸種の階級に對する乃木大將自刄の影響は勿論一ならず、或る者に對しては有利にして、又或者に對しては不利なり。若し讀者にして愼重に乃木大將自刄の可否を論せんと欲せば單に漠然立脚地を定めずして、之を論ぜず、前記の諸階級を標準として之を研究すべし。